土山瓦の誉れと歴史

江戸時代から昭和の終わりにかけて、土山と本土山、砥川地区では「土山瓦」と呼ばれる瓦の製造が盛んでした。

加藤清正が召し抱えた「江戸瓦師」の優れた技術と、一帯の水田下に広がる良質な粘土質の土、燃料となる松が飯田山から豊富に採集できたことが発展の理由のようです。細川藩政時代には「御用瓦」として名を誇り、明治になると藩の制約が取れたことで、瓦職人たちにより盛んに製造され産業として栄えたそうです。

「昭和50年頃から仕事の合間に、義父の瓦作りを手伝いました。田んぼを深く掘り土を採集して型を作り、木々を燃料にして焼く『だるま窯』と、灯油を使った窯で焼いていました」と話すのは、堀部貯さん(72)です。当時の瓦師たちは、瓦の製造はもちろん、屋根の設計・施工まで一連の仕事を担っていたそうです。

大正時代に最盛期を迎えた土山瓦。7～8軒ほどあった瓦業者も、戦後から高度経済成長期へと進むにつれ、セメント瓦の普及、後継者不足などにより廃業する人が続きました。現在唯一、土山瓦を守り続けているのが砥川地区の国道443号沿いにある「石金粘土瓦工場」です。5代目の石金敬司さん(71)と6代目の克己さん(45)は、熊本城本丸御殿の大仕事を手掛けています。また飯野小学校には、石金家から寄贈された鬼瓦などが展示されています。

土山瓦の話を聞かせてくれた堀部さん。名前の「貯」を持ち出して「貯まるのはうっぷんばかり」とジョークを飛ばします

飯野小学校に展示されている土山瓦

瓦師たちが厚く信仰してきた「土山の太子堂」

一丁地蔵を見守り続けて

飯田山8合目にある常楽寺。寺の開基は平安時代とされ、戦国時代にかけて天台密教の一大拠点となった場所で、300人ほどの多くの僧の修行場だったと伝わります。

常楽寺の山門から、嘉島町にあるサントリー九州熊本工場方面へと続く参道の一丁(109㍍)毎に、「一丁地蔵」と呼ばれる地蔵が点在しています。はるか昔、飯田山は女人禁制の山で、地蔵は入山できない女性たちの祈りの対象であり、参拝者や修行僧たちが参道の目印にしたと伝わります。かつては37体だったそうですが、江戸末期・嘉永時代のものとされる16体が現存し、平成になり新しくなった15体も置かれています。

土山地区に住む松本武廣さん(73)は23年前から、江戸時代の一丁地蔵16体の清掃や、前掛けを掛け替えるなどのボランティア活動を続けています。「土手に転がっていたお地蔵さんや、形が崩れたものも多くありました。その荒れ方に心が痛んでね」と松本さんは振り返ります。

江戸時代のものの中でも原形をと

一丁地蔵のお世話をする松本さん

気さくでおしゃべりも楽しい松本さん

嘉島町のサントリー九州熊本工場近くの土手に佇む花立地蔵

椎ノ木池脇にある一丁地蔵。春にはサクラが咲き誇ります